

演題名	牛胚移植における胚数・ランクが受胎率及び乳汁中黄体ホルモンに及ぼす影響		
発表者 氏名	小野垣 真 美	所 属	飯田家畜保健衛生所
<p>移植胚数や胚の品質の相違による受胎率、子牛生産頭数及び乳汁中黄体ホルモン（P）濃度について調査。</p> <p>調査は平成4年1月から5年3月までの間に管内O牧場において行い、移植は正常1胚移植（区）延べ33頭、正常2胚移植（区）延べ52頭、正常胚1胚・変性1胚移植（区）延べ6頭に対して実施。P濃度は、各区の受胎牛について搾乳直後の後搾り乳を採材しオプチェック牛乳用EIAキット（デンカ製薬）により測定。</p> <p>受胎率は、区36.4%、区44.2%、区66.7%で、全体では42.9%。生産子牛頭数は、区は受胎した12頭の受胎牛から1頭ずつ12頭の子牛が生産され、区は、受胎した23頭のうち流産したのは4頭、分娩した19頭から26頭が生産され双子率は30.4%、区は受胎した4頭のうち1頭が流産し、1頭ずつ3頭が生産された。区の発情後7日目のP濃度は約60%が20ng/ml以上で、区の同時期のP濃度は約60%が20ng/ml以下。発情後20日及び40日では区及び区とも多くが20ng/ml以上。</p> <p>以上のことから、2胚移植により受胎率が向上することから、今後は、変性胚を正常胚とあわせて移植する方法や正常2胚移植した牛の妊娠中期におけるP濃度の低下に対する対応等を検討していきたい。</p>			